長野大学紀要　第45巻第２号　　61―62頁（203−204頁）2023

〈令和４年度長野大学研究助成金による研究報告〉

（準備研究）

「近代内モンゴル東部における社会経済の変容と地域社会の状況
―満洲国以前を中心に―」

塚　瀬　　進*

Susumu TSUKASE

１　研究実績の概要

令和４年度は「近代内モンゴル東部における社会経済の変容と地域社会の状況－満洲国以前を中心に－」というテーマで研究をおこなった。開始当初は、内モンゴル東部で土地の払い下げ、開墾がはじまる19世紀後半以前の状況を明らかにし、ついで本格的な開墾がはじまる19世紀後半以降から満洲国成立（1932年）までの状況について考察する予定であった。しかし、研究を開始すると、19世紀までの状況に関する考察に多くの時間をとられ、19世紀後半の時期については、令和５年度に持ち越さざるを得ないことになった。以下では、検討をおこなった、19世紀までの状況について記述し、なぜ検討に時間がかかったのかについて述べる。

17世紀前半に活動したヌルハチ、ホンタイジは、軍事力の増強をはかる手段としてモンゴル人を配下に組み込む努力をしていた。ヌルハチ期では、来貢した使節への恩賞供与、モンゴル人有力者と皇族関係者の婚姻などで関係性を強化した。ホンタイジ期になると、モンゴル人を戦時に兵士として動員することが始まり、モンゴル人への清朝の法規適用がおこなわれ、モンゴル人を統治下に置く程度が強くなった。そして、八旗蒙古、ジャサク旗が編制され、モンゴル人は八旗制度または八旗制度を模倣したジャサク旗の管轄下で暮らすことになった。ヌルハチ期、ホンタイジ期のモンゴル人との関係については戦前以来の研究史が存在する。まずこれらの先行研究の消化に多くの時間がかかった。先行研究のなかでも重要なのは楠木賢道[(1)]、梅村直也[(2)]、岡洋樹[(3)]、達力扎布[(4)]の論考で、これらの研究が使っている史料（「清朝実録」「満文老档」など）を再検討しつつ、理解することに想定した以上の時間がかかった。調査の結果、予想した以上の先行業績が確認されたので、これらの論点をまとめる作業を別途おこなうことを決めた。具体的には「入関以前における清朝とモンゴル人との関係についての研究史の整理」という研究ノートの作成を現在すすめている。

清朝によるモンゴル人の取り込み、盟旗制度への編入に関する研究を読み進めるなかで、ジャサク旗の旗界はある一時期に、命令に従って編入されたわけではない事実が指摘されていることを知った。「内モンゴル東部のモンゴル人は清朝下で盟旗制度により管理された」という表現は正確ではなく、ジョリム盟やチャオウタ盟は順治年間には未だ成立していないことが档案の分析により明らかにされている[(5)]。入関後、モンゴル人はジャサク旗に編入され、旗界の中で遊牧をしていたと、という理解は間違ってはいないが、こうした状況は康熙年間以降に徐々に形成されたという認識に変わってきているのだと考える。

18世紀になるとモンゴル人が暮らした「蒙地」への漢人の流入が問題となり、諸史料の記述も漢人の流入、「蒙地」の開墾をめぐる記述がほとんどになっていく。ジャサク旗の内部構造や旗界がどのように設定され、旗界によりモンゴル人の生活がどのような影響を受けたのか、などに関する史料は「清朝実録」や地方志のなかにはわずかしか存在しない。これまでの研究は19世紀中ごろに書かれた張穆『蒙古游牧記』に依拠することが大きかった。『蒙古游牧記』は清朝下のモンゴル人の行政制度について詳述しており、清朝期のモンゴル人の状況を知る上では不可欠な史料である。しかしながら、その記述内容は19世紀後半のものであり、

環境ツーリズム学部教授*

『蒙古游牧記』が記述する状況が18世紀にも存在したとは必ずしも言えない。依拠する史料が少ないために、『蒙古游牧記』の記述内容を18世紀にも遡及しているような理解もある。令和４年度の研究の結果、18世紀の内モンゴル東部の社会変容を明らかにするためには、档案など新史料の分析が必要なことが判明した。

以上、令和４年度の研究は、入関以前の清朝とモンゴル人をめぐる研究を消化したこと、18世紀の内モンゴル東部の社会変容を考察するためには、新たな史料発掘が必要だという知見を得たことを総括として記したい。

注

(1) 楠木賢道『清初対モンゴル政策史の研究』汲古書院、2009。

(2) 梅村直也「八旗蒙古の成立と清朝のモンゴル支配--ハラチン・モンゴルを中心に」『社会文化史学』48、2006。同「ホンタイジによる左翼・右翼ジャルート=モンゴル政略：系譜復元作業を糸口として」『社会文化史学』58、2015。同「清初における八旗蒙古のニル構成と組織としての実態：遊牧ニルの検討を通じて」『社会文化史学』59、2016。

(3) 岡洋樹『清代モンゴル盟旗制度の研究』東方書店、2007。

(4) 達力扎薩布『明清蒙古史論考』民族出版社、2003。同『清代蒙古史論考』民族出版社、2015。

(5) 烏雲畢力格、宋瞳「関于清代内扎薩克蒙古盟的雛形-以理藩院満文題本為中心」『清史研究』2011年第4期。玉海「清代昭烏達盟的形成及其会盟問題探析-以翁牛特右旗印務処档案為中心」『国学学刊』2017年第三期。

研究発表（令和４年度の研究成果）

〔発表論文〕　計（　２　）件

著　者　名	論　　文　　標　　題				
塚　瀬　　進	マンチュリアにおける満洲人、旗人、満族				
雑　　誌　　名	査読の有無	巻	発 行 年		最初と最後の頁
『帝国のはざまを生きる』 みずき書林	有		2	0 2 2	658-680
著　者　名	論　　文　　標　　題				
塚　瀬　　進	満洲の土地制度と漢人流入				
雑　　誌　　名	査読の有無	巻	発 行 年		最初と最後の頁
劉建輝編著『満洲という遺産』 ミネルヴァ書房	無		2	0 2 2	5-48